

多様性の国・インドで働く

独立行政法人 国際協力機構 (JICA)
保健プロジェクト専門家 山形 洋一

1 多様性の魅力

日本のような「国」のつもりでインドを見ると、目が回る。むしろEUのような連合だと思いとわかりやすいだろう。インド・ルピー紙幣には英語とヒンディー語のほかに、15の言語、11種の文字で金額が書いてあるが、それはたとえばヨーロッパ各国の言語で「100ユーロ」と書いてあるようなものだ。これだけ多様な民族と文化が共存し、民主主義を享受していること自体、賞賛に値する。

一方、最近発行された2ルピー硬貨を見ると、英語、ヒンディー語、アラビア数字のほかに、指を2本立てた図が彫られている。日本ではインド人の「二桁掛け算」能力が注目されているが、それはごく一部の人の話で、裏にはまだ多くの非識字者がいるのだ。

「多様性の中の統一」は、大国インドの誇りでもあり、重荷でもある。評判の悪いカースト制も、多様な人種を「坩堝^{るつぽ}」で溶かさず、それぞれの生活スタイルを守らせる仕掛け、と見ることができる。憲法でうたっているカーストによる身分差別の禁止は、なかなか現実のものとはならない。

駅や市場の人の流れは多彩で、まるで万華鏡のようだ。一人ひとりのファッションも、補色を戦わせて、あいまいさがない。日本流のつつましい微笑が通じない、主張の世界。そこに加わる暑さと臭気。この狂騒の中で小突きまわされている自分は、いったい何者なのか、にわか哲学にはまる人もいれば、あきれて二度と来ない人もいる。

2 普通列車の旅

「インドを知りたいければ、3等列車で旅をせよ」とマハトマ・ガンジーは言った。3等は廃止され、今では2等一般（空調なし）車両が最低等級だが、とにかくインドの人口の大半を占める地方の貧しい農民と同じ空気を吸うのは貴重な体験だ。私が住むボパールから、仏教遺跡サーンチ（世界遺産）まで片道1時間。たとえ立ちっぱなしでも我慢できる距離なので、週末によく旅をする。混雑、争い、譲り合い、辛抱と寛容

と連帯感を肌で感じる。



写真1 ボパール駅。2等普通車両の扉が開くのを待っている。人だけでなく、荷物も多い。

1984年の毒ガス事故で有名になったボパールは、中世から人口湖がいくつも建設され、「湖の町」とよばれている。デリーの南約600kmにあり、ムンバイ、チェンナイ、バンガロールへと分かれる重要な中継点だ。日本では幕末から明治にかけての時代、ムスリムの女王が4代続いて開明的な政治をした。そのせいも、州都にはおっとりしている。

ボパール始発の鈍行はほぼ定刻に発車。車窓にはまずスラムが見えてくる。青黒い溝に踏み込む豚と水牛。彼らの餌場を見ると、毒ガスの残留よりむしろ、重金属やPCBのほうが心配だ。

プラスチックの容器や袋の散乱は、日増しにひどくなっているように思う。ヒンドゥー教徒は食器の共有を嫌う。昔は祭りや宴席で、木の葉をつづった使い捨ての食器が使われた。味のついた木の葉は、翌朝、犬がなめ、牛が食い、踏み砕かれて土に混じる。プラスチックは清掃業者が回収しているが、そこまでは徹底されていない。

さてこのあたりはデカン高原の北のはずれ。もう少し行くとヒンドスタン平原に飲み込まれる。車窓は赤い砂岩の丘と、黒い土の麦畑、豆畑が入り組んでいる。

サーンチ駅前にはオート三輪のタクシーが1台。だがそれには乗らず、すぐ先の市場まで歩いて、1杯3ルピー（約9円）の茶を飲む。サンダル^{サンダル}の鼻緒が切れかかっているので、直しに出すと、こちらは1件5ルピー（15円）。

賤業とさげすまされながらも、とにかく黙々と丁寧な仕事をしていれば、日々の暮らしが成り立つ。それは貧しい顧客がまだまだ多いからだ。日本のシャッター商店街を歩いた者の目には、「貧者の花見酒」がまぶしく映る。



スラムに住む祖母と孫娘

だが大量消費・物流社会はここにも押し寄せてくる。繁栄から取り残された大勢の人たちに、どのような未来があるのか、私には想像がつかない。

③ 地域の保健システムを改善

私は独立行政法人 国際協力機構 (JICA) の専門家として2005年9月に派遣され、技術協力を行っている。目的は農村部に妊産婦の死亡率を下げることだ。

「技術協力」といっても、日本から特別な技術を持ちこむわけではない。現地にある知識や人材を有効活用し、サービスの質を上げるために助言している。経済発展の目覚ましいインドでは、資金に困ることなく、優れた政策もあるのだが、それらがなかなか現場まで届かない。

インドの開発の難しさは、何千年の歴史を生き抜いた頑固な農村と、植民地時代からの伝統をもつ官僚機構とが、互いに協力したがるらないところにある。この2つが手を結べば、「サービスの質」は自然に上がるはずなのだが。

さいわい熱心で有能なインド人スタッフに恵まれ、彼らと田舎の公立診療所を見回り、機材の配置や使い方について助言をし、そこで働く助産師などに研修を行い、コンピュータによる情報整備を手伝ったりする。ときには中央に口をきいて資金の流れをよくすることもある。



写真2 JICA保健プロジェクト。助産師、男性保健師、助産監督師らの協業を、JICAは陰で支える。

こうしていくつか、「よい業務」のモデルができると、それを州や国の担当者と検討して、彼らの政策や計画に反映し、地域拡大を図る。まるで経営コンサルタントのような仕事だ。

プロジェクトのセールスポイントは、実学、実務、実行。日本的な「実」へのこだわりと、外部者の特権を生かした上下間の調整とで、成果を挙げつつある。

④ インドと日本はどこまでわかりあえるか

日本が仏教を受け入れて以来、インド・天竺は、唐土の向こうの神秘世界だった。明治になると、西洋との文明対決の中で、東洋の連合を求めた。だがごく普通の日本人が気楽にインドに出かけるようになったのは、「団塊の世代」あたりからだろう。それからまだ1世代しか経ってはず、日本人のインド理解はまだまだ断片的だ。かつては牛と行者の国。今はITと二桁掛け算。どちらも全体像からは程遠い。

一方、インド人の日本崇拜は思いのほか強く、植民地の桎梏に苦しんだ彼らにとって、軍事や産業・経済で欧米と対抗した「日出づる国」へのあこがれは強い。黒澤明がインド映画に与えた影響も大きく、最近のTVでは『風雲! たけし城』や『クレヨンしんちゃん』が受けている。

混迷を続ける現代日本にとって、インドは精神安定剤となろうし、中国の覇権拡大に対するくさびの役も期待される。互いの近代化の経験を分かち合えるようになれば、両国にとってその利益は計り知れない。だがそのためにはまず、断片的なイメージに頼らない、複眼的な視点が必要だろう。

その手がかりとして仏教辞典が役立つことを、最近発見した。日本文化に蓄積されたインド色の豊かさを教えてくれるだけでなく、現代のヒンドゥー教を理解するヒントにもなるからだ。



写真3 インド人スタッフが中心となり、助産師に業務計画法を指導する。